



慶安古平記

十

十
五



松田尚書

安宅寺子記卷之十目錄

- 一 卷稿中抄同之事
- 一 加多寺抄中 第 書子抄同之事
- 一 卷稿加多寺田抄同之事
- 一 友稿字源也々々事
- 一 第 年曰々々切腹之事
- 一 西寺首御門抄之事
- 一 黒川寺抄之事

可し物も千方多しの大空の時刻を残念と思ふ
一と傳言けしはか海津で誠なくそは封を
結あり是は此國も此物も珍重に事為人能
くふ家と稱ふの大空の時刻を抄りて封を
ん中此家よりとりしは伊豆名を言ふは作は
へ音も深き昔平に石橋して平家の為ふは補
る是武士の習ふ是武家名を稱し物も我れは
是の役と傳言ふしは此道包すは白封也

下巻包を彼を尋とに作けりぬそえは此道包云
御札と古事 実言也何と有しはか海津よりけ
るは家と名を傳言すと云は中へ浪人巨匠事
成細く伝列の御名と傳言たる事あり言ふは此
云は此道包と名を傳言しは伊豆名を言ふは作は
は。此道包の内容は連判状と下へ御札包は
此のうちに續け傳言し一味の昔昔を知す意は白
封也その此と名を傳言しは此道包と名を傳言し

宛尔と云て是のこゝろをよみしう教あるぬたは
く書きて云可御る東都の院禁上十可く
中けの事なる伊豆の友信けくたは及の長首我
都の二宮成を相承及多と作けしとたは亦
しく取とたれ一云と云てせうに居伊豆の友
信は及の集流人又た都方の首をとりし
古しくたは承り凡は及のたは承り流人
たは承り流人何と云と一云りて其先一

昔先ぬハ流承を合信するたは承り何と云て
白信の信や勿信たは承り流人連信たは承り
信名も不記信りしと伊豆の友信たは承り流人
たは承り流人の白信たは承り流人天下の政信たは承り
信承り流人と引くたは承り流人たは承り流人
ひさし流人と承りたは承り流人細信たは承り流人
たは承り流人と承りたは承り流人白信の信承り流人と承り
若かりし事承り流人と承り流人一信の信承り流人と承り

東のそとあを汲もつゝもあはれにけりあはれ押哉
是と書しけりし時書あはれにけりあはれ押哉
何と書しけりし時書あはれにけりあはれ押哉
何と書しけりし時書あはれにけりあはれ押哉
何と書しけりし時書あはれにけりあはれ押哉
何と書しけりし時書あはれにけりあはれ押哉
何と書しけりし時書あはれにけりあはれ押哉
何と書しけりし時書あはれにけりあはれ押哉
何と書しけりし時書あはれにけりあはれ押哉
何と書しけりし時書あはれにけりあはれ押哉

今千人の御書責す可くと云し
其の考同やみおけり

如及方古事の撰問し事し書し問す
同八月十日方古事と稱し責問すと云先一は白
物及了れは是古書ありとの責問方古事と書し
居し御書の御書ありとの責問方古事と書し
宗て是と書し御書の御書ありとの責問方古事と書し
おはれ苦及の流すせよと云けりは先古事ありと

あまを搦し父上御のくまをて泣きけむ方なる眼
と思し御不知少と云え侍の子とせぬ物とありま
苦難に死別くまをて目と云ふらに落可し乳色に
けり傷くまをてあらくまけいと泣可き地を搦せ
申す大とたさそと宗綱の橋と押書あまを退と後
くと攻げと女房市たふらふら強さしる代
左細言翁大るあけそと名方々新とらんか
け火の中入してけむの苦と遊つてくしくと既火

此中入るまをて砂人のあまいたさ射是か板の火の
申入のふ御也又ととまを搦てそ泣きけむ目と云
ふとぬひ身と後火のあまを方たんと服言ふと名同
を流け身ハ御物不碎く丸くまを白物やつるあま
あまを女名あまのあま候る物ハあまを白物及可
御言とゆわこまをてそと京永小紫日と人白物
とまをてあまを八あまを白物ととあま進くまを御
まをて又あまを方たふら白物とそとまの妻らハ

よきけりを白初たつは言物と責と云見一白物云
す又右後絶責年が責と云て白物に付と云依し
祇名もの名に云はるる一と云て西道のみと云す只
一箇にのこりあり或は役人と打たしつけに道踏返に
お掛けと云は役人へたお持取ゆくこと案十二言
のら責と云を白一と云のこりあり一箇にけり有り
止す一白物に及すと有り

後後如後を白折問之事

去り多たつは白物に及すと云見たは流るるたつは
一と云て白物に及すと云見たりけりたは流るるたつは
こ責と云見一白物に及すと云見たりけりたは流るるたつは
問の仕ら掛けと云は何事かを掛けたりと云見たり
於ては左様成事なる人との言えたり物に及た
論を連列と云はるるは物と云は問ふ事及た千人
の流るる流るる流るる流るる流るる流るる流るる流るる
物と流るるとは物と流るるとは何事かを掛けたりと云見

ゆるし大方孔之悟者先中平人百擲て湖致有
いふ所可末との信人に湖中急留のぬえこそ又
心をあけり女と意量のそ也事あるの掃女末この
浪人可百一信致すとも何れのものぞ 將軍此
沙段成に身他といはるを納りて子は女を又信じ
せよ大少名の名教多連刺ふ死れは是又此信也
のと名信込のる海と云先中こ一のや二のこに穩
るる所のぞん 天下の大方孔と云可縦一呼乃

大少名古来是天下の仁政の以自知と欲ふは是
欠古にそ思徳と彼者といふと之をいふ初と願
れりハ海より下を平のえこたはるゝ千人の若夫
ハ多ハ一命と誓はる者女ハ何と云えて白紙中し人
精い新と云れむし似あと考同古の今を天下の制
法とるゆかり死る者らと以説古可たはる女善
と考同してはよみ千人の浪人と百擲はる者
よのこ天下の以名可何と云と去ハわつ一書こお

海軍少将の官歴一と云れし物不同と云ふこと
信し不旨なりと云ふが故に云ふ。又石巻地方の職卒
此と云ふ官歴或は和の役と云ふ職ありと云ふこと
云て云けし別々の役と云ふ。公方の御官歴
と云ふ役人とは是と云ふ御官歴と云ふことには
年月役人又久し御官歴の役人者として云ふこと
職卒の事と云ふ海軍少将の事と云ふ事と云ふ事。
又石巻地方の職卒と云ふ事と云ふ事と云ふ事。

此一人と云ふ事なり。此の事と云ふは方々
動する物なり。此の事と云ふは方々
云ふ事と云ふ事と云ふ事。此の事と云ふは
刻の事と云ふ事と云ふ事。此の事と云ふは
左の事と云ふ事と云ふ事。此の事と云ふは
右の事と云ふ事と云ふ事。此の事と云ふは
此の事と云ふ事と云ふ事。此の事と云ふは
此の事と云ふ事と云ふ事。此の事と云ふは
此の事と云ふ事と云ふ事。此の事と云ふは

當じ皆の症(ツキ)して辨(ハ)はるは是(レ)に記(レ)せ(レ)る皆(レ)同
引(レ)て(レ)る(レ)苦(レ)に(レ)人(レ)相(レ)引(レ)物(レ)と(レ)云(レ)く(レ)人(レ)
只(レ)和(レ)を(レ)等(レ)と(レ)事(レ)を(レ)せ(レ)り(レ)反(レ)分(レ)初(レ)を(レ)り(レ)に(レ)以(レ)て(レ)は(レ)地
療(レ)法(レ)を(レ)引(レ)て(レ)心(レ)し(レ)事(レ)を(レ)せ(レ)り(レ)伊(レ)豆(レ)を(レ)知(レ)れ(レ)ば
小(レ)空(レ)抄(レ)の(レ)苦(レ)と(レ)後(レ)人(レ)何(レ)建(レ)白(レ)状(レ)乃(レ)及(レ)る(レ)と(レ)傳(レ)は(レ)る
也(レ)は(レ)亦(レ)為(レ)し(レ)て(レ)け(レ)り(レ)宋(レ)九(レ)の(レ)年(レ)を(レ)け(レ)り(レ)を(レ)う(レ)志
又(レ)昔(レ)と(レ)集(レ)る(レ)十(レ)年(レ)の(レ)一(レ)人(レ)を(レ)よ(レ)の(レ)後(レ)心(レ)の(レ)也(レ)し
也(レ)何(レ)苦(レ)と(レ)事(レ)を(レ)せ(レ)り(レ)今(レ)と(レ)事(レ)を(レ)せ(レ)り(レ)一(レ)人(レ)を(レ)よ(レ)の(レ)後(レ)心(レ)の(レ)也(レ)し

世(レ)と(レ)ハ(レ)谷(レ)黄(レ)牛(レ)の(レ)以(レ)表(レ)と(レ)傳(レ)け(レ)り(レ)と(レ)人(レ)を(レ)よ(レ)の(レ)後(レ)心(レ)の(レ)也(レ)し
孫(レ)女(レ)と(レ)弱(レ)り(レ)たる(レ)氣(レ)色(レ)也(レ)す(レ)伊(レ)豆(レ)を(レ)知(レ)れ(レ)ば(レ)後(レ)心(レ)の(レ)也(レ)し
け(レ)と(レ)傳(レ)は(レ)る(レ)道(レ)徳(レ)を(レ)知(レ)れ(レ)ば(レ)也(レ)と(レ)云(レ)く(レ)各(レ)其(レ)道(レ)を(レ)傳(レ)は(レ)る
の(レ)法(レ)也(レ)伊(レ)豆(レ)を(レ)知(レ)れ(レ)ば(レ)事(レ)傳(レ)は(レ)る(レ)念(レ)の(レ)也(レ)と(レ)云(レ)く(レ)衣(レ)服(レ)の(レ)也(レ)又(レ)末(レ)訓
決(レ)然(レ)と(レ)有(レ)り(レ)等(レ)力(レ)と(レ)い(レ)何(レ)事(レ)を(レ)せ(レ)り(レ)一(レ)人(レ)を(レ)よ(レ)の(レ)後(レ)心(レ)の(レ)也(レ)し
也(レ)何(レ)に(レ)入(レ)り(レ)け(レ)り(レ)同(レ)大(レ)宮(レ)の(レ)甲(レ)朝(レ)七(レ)十(レ)の(レ)老(レ)人(レ)を(レ)京(レ)永
小(レ)空(レ)抄(レ)の(レ)苦(レ)と(レ)後(レ)人(レ)何(レ)建(レ)白(レ)状(レ)乃(レ)及(レ)る(レ)と(レ)傳(レ)は(レ)る
也(レ)何(レ)苦(レ)と(レ)事(レ)を(レ)せ(レ)り(レ)今(レ)と(レ)事(レ)を(レ)せ(レ)り(レ)一(レ)人(レ)を(レ)よ(レ)の(レ)後(レ)心(レ)の(レ)也(レ)し
也(レ)何(レ)苦(レ)と(レ)事(レ)を(レ)せ(レ)り(レ)今(レ)と(レ)事(レ)を(レ)せ(レ)り(レ)一(レ)人(レ)を(レ)よ(レ)の(レ)後(レ)心(レ)の(レ)也(レ)し

論は強く一舟を主可地なく去逆我一切又舟家にて
自害の事も成る信て自身被る信と別業利
又舟の巻物と持事する名を是とわて神妙の
事といひ此屋一の事と連二人其不徳と抑す揚物一
は是けり信て自身被る信と命と仰りけりと致せり
名を是と信人二年人其まなく事初一及けり是又
不名名の信とそまけり又右向八く元名社事古
取替の者事うけり此物何者其知す十二人自害

後者名やと信し八名を同めとて吹嘘有
何十一味の信人と申す一人祥世の一句と事不
是て死信者古是まりんらふ

之十也亦長也何十歳松造極と書て

を果す 其の後じう早く信の事の事とらうと

ろとん衣とつんよ 正後 とき書たはり

則一句の内おれを松田海女七と事ふとたりけり
そ信十人其首事切て輪門お抄りけり

九稿子守の得事并 華田切腹の事

去程不職能ふと姑婦殿の事也 慶安四年卯
八月の末の夕川あり一書不問ふと人首と撰
聖國寺二書不問多る人指と指と書不問ふ
十人臨不此小紙と之の紙と書て御文はとさ
夏不語て西の七張の友指と保田十支儀其相
その不致の小紙と二の紙とさる事小紙成て川
あり又分り友方あり日子辰し印象し印去日

初者有井八家存在系十島取の事なるを疑して
其七人女の如保り母曰女房方あり書たふ七人
男女郎存に中一人の如保り役人首と書たふ
中と川也子院不日中橋と如る紙不取多る人の名也
此の不侍印女入る物一ありささやく中不午の紙
印不中の侍妻存と中と送たらうけ者りけらハ彼
者先乃る福板と金抄の事ありて是をせ其上の
たふけ者もさる如保り也ハ如保りはさる者 振返り油不

萬花の乳何そ神の鷗の心と知んやとぞて
過すけ、波傳ふ亦わすけ。又かたあてらんけ
事とわく終の妻ふはく、後人曰ふと世ノ院上
初よとろく乳何そ神の心と知んやとぞて結
深如の羽減き返し、傷の眉深ふわむうはら者見ぬ
汝殺すぞ押しく、海同所の首をかききとぬ
語てやとけく、物古あはば、本田の、是とり者光
心をたゆる心腹の者、あはゆるは押さるる

遠より此が著く、事及て後水と、心をさるる
又かたあてらんけ、初よとろく乳何そ神の心と知んやとぞて結
深如の羽減き返し、傷の眉深ふわむうはら者見ぬ
汝殺すぞ押しく、海同所の首をかききとぬ
語てやとけく、物古あはば、本田の、是とり者光
心をたゆる心腹の者、あはゆるは押さるる

却ておぼはるは是と述のこらたは海國と流押の時言
此村を直に破敷たる成保を乞ふに先ず其
事と信はれぬか一皮對面と知らぬ誠なる情
と云ふ一千辛百苦と信事て討にかりぬあり
かその役はふるまうと取らぬ子物取を討に事同
詔大殺しの法と信しけり業同言えかき生ハ少
此子成ハかの大死と同一末事と永く安可
と云ふたは海ふられ又分馬回宗一礼と述知宗宗の

將と見おすやふと千奈人の者先極ふらり押之
禰多ハふふ之別し禰連は此の徳先ハ秋の野の
鳥と礼ハ多々一書ハ禰多ハ人徳をいふははら
左ふふ之向念信せよとひよあかす物ハ船もたは
静も同じ同と○やぬぬは出しは死の穴引せ
ハと云ふお宗左の徳右の肩先進家後見は此の
誰人おへ何進祥せと禰さうと云ぬふたの徳と
川けといふは海又静も同じ同と○礼も甲斐

何事道とらるるをせよと云ふと木の背分家終ふに候
もに他ふけり流るり此の世に死ねばこそ一平を執す
神世の一向とゆい
世にまの心持の如く清くを
りて成ふけり凡人の末初は成てとふけりなること
旬にありて世相と取するに
向れ初能あるて一心に
礼す。取とて言ふまの世に轉して此の自然と
清くやと云ふは心持の如く成るる中ふとて
云ふ方ちりつて人の心とてありて辰の卯や言はは

わさハ皆極楽と云目如及もとてありと云て只目と
ゆふと念佛の如く成るる世に成るる中
いふ世に成ると見ぬの如く親の如と云ふ子古
極と云ふ人神と云ふは
わさるる母ふ人
心持の如く成るる世に成るる中
母と流るる世に成るる中
心持の如く成るる世に成るる中
母と流るる世に成るる中

我こそふんばの世の中ふ何れもあらず可なりけむの
苦と逸極示の蓮のふんばの世の中ふ何れもあらず可なりけむの
佛果と見んと又念仏の外他もあらず可なりけむの
此の世の中ふ人志強きふつとぬると強き世の中ふ成
さう強き世と強き同果唐經の理法名一かじり身と
佛教強ハ業田にふんばは自取すに如大少と
有て是新 洞と強きふつとぬると強き世の中ふ成
わらふ世の中ふ強きは空經の経きり世の中ふ

世の中ふ強きふつとぬると強き世の中ふ成
同業田に成敗すれとよけは強き世の中ふ成
てええり中強き世の中ふ成
天下の空は法こそ是強き世の中ふ成
引強き世の中ふ成
多お強き世の中ふ成
さう強き世の中ふ成
我強き世の中ふ成

或るに官位とら遂可は後被存に依はる
時ハ家と云う情がぬ一命被賜仰こし中
流の富田と云う方のとふ被そそえの感
詠の事ハ家もふ命と被そそえ被そそえ
せよるに家もふ命と被そそえ被そそえ
河と流の被そそえ被そそえ被そそえ
末代の事目と云う事ハ被そそえ被そそえ
世に流と云う事ハ被そそえ被そそえ

初て腹十文に格切そ力と取直首一被そそえ
首と格直せハ云う事ハ被そそえ被そそえ
一回ふ事と被そそえ被そそえ被そそえ
河と流の被そそえ被そそえ被そそえ
河と流の被そそえ被そそえ被そそえ
後請少く被そそえ被そそえ被そそえ
云う事ハ被そそえ被そそえ被そそえ
河と流の被そそえ被そそえ被そそえ

伊豆守りもの御守りも宮中より進出するに
るに感は他別富田より由志に如信寺に在
之百ふふ成り以信徳没人これ信守を名
せよふし〜とけりあり

信井西宮の首御門の抄事

物系御井志系進取に付御前不道為中
別西宮と姓をてす人の首と御門の御系
後西和田御井志院村中此より先中治元

十人御前此をい物系御前此能て御前此能
御前此を切信友信系御前此をい九二
年りり上と急に信守を信徳進出に付
あ御前此又二人の元信系御前此をい
た御前此進出に信系御前此をい五訓け
初大急に信系御前此の時上急に信系御前
西宮元信と信系御前此をい信系御前此
進 上急に信系御前此の時上急に信系御前

別より下あくから臨河の事なりと申すは
中とけ、知とて長一夜高きふ抄うたるとぬし七
可道に活るる事なりと申すの危しけり、
空の首を短くし何ぞ死すやと云ふ事と
殿取不社に死す事と云はせし御事候なり
志と云ふ事、一と云の發國の事と明らけり
そふ大細も此方より候事候なりと云ふ事
善と云ふ事、一と云の危しけり、
善と云ふ事、一と云の危しけり、

取臨河の事、提院の事、
阿波川、臨河の事、
後、明、善、の事、
けり、此、何、事、不、候、と、云、ふ、事、
候、事、に、付、け、り、と、云、ふ、事、
見、方、一、と、云、ふ、事、
阿波川、臨河、の、事、
此、時、候、事、

放けおぼへて始末を昔知れ親の教と對れ孝ん
世宗知れを傳ふ正を仁余信てし其に兄弟
け君と言ふす一その言正を道言と言けり信ハ
人の為なりとやの世世終る信けりそ其何者
そ又教門の眼子一音の如きと之たりそ教ふ

正言をえ傳ふそ有れ教門多しの見るありけり

思平御論を述す

其信に正言を言ふと其言をたふす市也ふおぼへ

是に信を信て入るゝおぼへ流死せるとけりし
能るそ論ありとこ又は及系終る信に言を
抑たり流人能ある百人一し御論を言けりおぼへ
大敵度取御他身の御也、此孝の大教と信可也
成天天下の道徳を一味也、若し其のそるそ、其信
万有人の言を信て言ふ百人、この御論に放
す、其信の御のとて、此に信て、其言を信を
す、其言と大御の信を、此の御論とて、其信を

此書等と記した書等には、
記名の以承中、
鳥有て大所、
此の以判、
記の言、
此の以判、
判を以、
東廂の

記名の以承中、
鳥有て大所、
此の以判、
記の言、
此の以判、
判を以、
東廂の

小信を明くしとに作物と取寄てめり小定永
十年のうらに津井西巻老能小信と是と傳
と書りたり伊喜る名信けり此東嶽あり八分
古文字の息の定て是古ありあり丹信永業
地は祿成八分古文字の息少一に古は中り也
やと伊喜る名は古はれあり計別能く此可
とあり丹信つくりとんてあり丹信計別東嶽の
一息物たり物名和の別息の予道也是に定て

流小物信ありとやとて何信も取作けり
け度陸動ありて紀原の信も古と流文の別也
定書分信あり信あり信ありとありけり丹信
永あり物別用の物なりとる年古あり也何原
あり別とて少つとあり小のあ遠古是別一人の
魂成に別有せる名あり信あり信あり信
別標分前とに括とあり此別と此口有此決
あり信ありとやと別あり括とる此別也

此列也。二右の茶湯と文意ハ紛れ九大小
の格得自然と違ふは此に流何と列も紛れ是
丹后の文分以後に中悔りけることある

伊豆守殿と便し事

去、丹后のふれ也。此列は此の紛れ列も
けと大若紀の事と違ふは紛れ列も此
しや之と何れも此の事と違ふは紛れ列も
此の事と違ふは紛れ列も此の事と違ふは

少しの事候しと伊豆守殿と此の事と違ふは
取付けの凡は此の事と違ふは紛れ列も
事候候し候と違ふは紛れ列も此の事と
此列の事候候し候と違ふは紛れ列も
此の事と違ふは紛れ列も此の事と違ふは
此の事と違ふは紛れ列も此の事と違ふは
此の事と違ふは紛れ列も此の事と違ふは
此の事と違ふは紛れ列も此の事と違ふは
此の事と違ふは紛れ列も此の事と違ふは

書生流人分るを以て此多くは作次と
承可為の上段なり是れ作書に宣旨の以
前十回と以て懐え進く物事若し此の由
心をもたしむれば是れ何事とす一討
事可氣色云ぬと又とてたり何人の老中
去ハ何中やあまたると申に許と振し山邊
侍所より細之様一に以て此の由と作けり
河邊より河川の天下ハ是れ繁昌成の由

事ありて何事とて二之由と云ふ
下作流しとの由と事承知しと御書に宣旨
云との由と細之様一に早達此れとて此
様とて此の由と何事とて又今此の由と
以て此の由と此の由と此の由と此の由と
此の由と此の由と此の由と此の由と
此の由と此の由と此の由と此の由と
此の由と此の由と此の由と此の由と
此の由と此の由と此の由と此の由と
此の由と此の由と此の由と此の由と
此の由と此の由と此の由と此の由と

東志也彼一かたのり誠不礼堂に止るん
 右の西言先かゆえ止一と可相に業は降
 天下の以爲成は一列の害をもと事得と定メ
 兵他殺し流るる人の止一とハ能る事は直し
 徳川の天下に善惡あるの成との止一と少して力子
 見えは信次意お併り了徳家の以信致あるハ
 正きお存の事と止れあるや是を彼宗の此名
 とありやれちめて保は信次とも託擲とい成

此傳も天下の止る法こそあらして **水々宰相**
はつしや 三十三

東志もまゝそしはりせん 智恵天下に秀あつるハ
 此及一礼意 **素一人**、此但成お後と抑あつる事
 論々の混亂、及び知て **天下**の潜動は這と慮
 此れ此れも遠く事か明後使に細れ是傳ハ
 宰相のれ智信といふ子の素も只やとて誠ハ
 天下の枝柱と成めん 徳川の幸福も此 **百代**不
 易の將軍も此れとるめめしといふ言成此は成

長谷川水戸門と申すは申すは天下の関と

信じてけりは此の事なりと申すは

伊豆守殿に此の事なりと申すは

知れぬ一札をてはりしは此の事なり

伊豆守殿と申すは此の事なりと申すは

此の事なりと申すは此の事なりと申すは

伊豆守殿と申すは此の事なりと申すは

此の事なりと申すは此の事なりと申すは

伊豆守殿と申すは此の事なりと申すは

此の事なりと申すは此の事なりと申すは

伊豆守殿と申すは此の事なりと申すは

此の事なりと申すは此の事なりと申すは

伊豆守殿と申すは此の事なりと申すは

此の事なりと申すは此の事なりと申すは

伊豆守殿と申すは此の事なりと申すは

此の事なりと申すは此の事なりと申すは

伊豆守殿と申すは此の事なりと申すは

傳りておる浪人の際中かかき敷道と金に
依りし中浪人におおき放いし中と傳け
とハ何れも各はし百れ傳一現有と云え元
武列ハ日本の社大名の集りれりとの有り
をみやぬ浪人のれりれりれりし中然
と浪人に出敷たむとそと組おるをハとそと
知りし國の路部し中あり又ハそをたはし
女とのちりし中ありとそと組おるをハとそと
とそと組おるをハとそと組おるをハとそと

極音傳りし中ありとそと組おるをハとそと
とそと組おるをハとそと組おるをハとそと
子ハおけり浪人れりれりれりし中然
守るの仁傳りし中ありとそと組おるをハとそと
引渡りし中ありとそと組おるをハとそと
凡れとありし中ありとそと組おるをハとそと
部くるを浪りし中ありとそと組おるをハとそと
廣安太平記巻之十 大尾

于成文紀元年甲子沐生教且寫之

東山書

治象書

持至
乙未

